

近世・近代における中国語の接尾辞「～家」の 受容と意味用法*

羅工洙**
gsna@ynu.ac.kr

<目次>

- | | |
|--------------------------|--------------|
| 1. はじめに | |
| 2. 近世・近代を通して見た「～家」の語について | 2.4 「洒家」について |
| 2.1 「自家」について | 2.5 「渾家」について |
| 2.2 「大家」について | 2.6 「火家」について |
| 2.3 「奴家」について | 3. おわりに |

主題語: 中国俗語(Chinese spoken language)、江戸・明治(Edo・Meiji Period)、漢字表記(Chinese characters)、接尾辞(Suffix)、～家(～ka)

1. はじめに

近世以来、日本に伝えられた中国俗文学(小説や戯曲)には、伝統的な漢語とは異なる語が用いられている。所謂白話文学の白話語彙(以下、中国俗語と呼ぶ)である。中国俗語は、現代中国語に継承されている語もあれば、現在は死語となっている語も少なからずある。

日本における中国俗語の受容などについての研究は、主に日本で読まれている中国俗文学や翻訳の語を対象にしている。近世・近代の日本文学における通時的な中国俗語の受入れや使用状況、意味用法などの総合的な研究は殆んどなされていない。日本の近世には、唐話学という中国学が行なわれたが、それが日本の言語の世界にも影響を及ぼしている。筆者は、各種の中国俗語の受入れなどについて通時的な研究を行なってきた¹⁾。

* 本研究は、韓国研究財団2017年度中堅研究者支援事業(課題番号2015S1A5A2A01009323)により作成された。

** 嶺南大学校 日語日文学科教授、日本語史

1) 羅工洙(2015.12)「近代に於ける『乃+N』の語の意味用法について」『日本語文学』67、韓国日本語学会
——(2016.02)「近世・近代に於ける『所天・良人』について」『日本近代学研究所』51、韓国日本近代学会

考察をする際、ただ幾つかの例を示して終える形の研究は、言語の歴史を把握する上で深い研究であるとは思えない。言葉にも厳然たる命があり、その発生、展開、消滅などの過程を顕微鏡で眺めるような極微視的な観点から言葉の小史を詳しく眺めることが必要であろう。

今回は接尾辞としての役割を担っている「～家」の語の受入れとその歴史的展開について見てみようと思う。この研究により、巨視的には日本の近世・近代の唐話学の影響が分かるし、微視的には人称・呼称の接尾辞「～家」の語の実体とその意味用法が明らかになるとと思われる。

人を表す接尾辞には「～家」の外に、「者・士・員・坊・漢」などがある。ここで特に「～家」に注目した理由は、中国俗語由来の語が多いことにある。勿論、「～家」の語は、近代以来の西洋文明の影響による新概念の漢語が多数を占めていることは確かである。『日本国語大辞典』(第2版、以下『日国大』)の「～家」の見出し④を見ると、

一道を専門とする人。それにすぐれている人。行動にある特徴をもつ人。/画家、作家、大家、儒家、道家、法家、墨家、諸子百家/好事家、小説家、実業家、専門家、読書家、感激家、儉約家

といった意味と例を載せている。これは何かを専門とする言わば職業とつながるもので、広い意味では呼称ともいえる。ただし、本稿で考察しようとする中国俗語の人称・呼称とは性格を異にしている。『日国大』に挙げられている例は、『分類語彙表』(1.2340人物)²⁾により詳しく提示されているので、それを見てみよう。

大家、老大家、美食家、故実家、儒家、實際家、理論家、空想家、夢想家、実務家、事務家、技術家、発明家、手腕家、敏腕家、活動家、政治家、経世家、外交家、行政家、法律家、史家、歴史家、郷土史家、経済家、思想家、評論家、批評家、革命家、運動家、(出家・在家)、迷信家、篤志家、名望家、社交家、交際家、発展家、専門家、愛好家、愛犬家、好事家、収集家、画策家、策略家、野心家、策謀家、陰謀家、不平家、楽天家、勤家、努力家、愛煙家、儉約家、旅行家、探検家

_____(2016.08)「近世・近代における中国語の『～哥・～姐』の受容と展開」『日本近代学研究』53、韓国日本近代学会

_____(2017.02)「近世・近代に於ける『阿～』系列の中国語の呼称について」『日本近代学研究』55、韓国日本近代学会

2) 国立国語研究所(2004)『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書株式会社、pp.88-91

さらに、「成員」(1.24)には、「技術家、教育家、作家、小説家、文芸家、文章家、文筆家、著作家、著述家、翻訳家、評論家、随筆家、演出家、戯作家、芸術家、美術家、音楽家、作曲家、声楽家、箏曲家、画家、漫画家、書家、書道家、写真家、彫刻家、陶芸家、建築家、落語家、拳闘家、格闘家、宗教家、禅家、事業家、実業家、企業家、起業家、銀行家、理財家³⁾のようにたくさんの語が挙げられていて、「～家」と関連した語が実に多いことが分かるだろう。しかし、これらの語は、中国俗文学に用いられる語ではなく、新しく出来た新概念の語である。

本稿で取り扱おうとする接尾辞「～家」については、香坂順一の『水滸伝』の研究に比較的詳しく言及されている。香坂順一⁴⁾は白話語彙を多方面にわたって研究していて、日本語への影響を考察する際、必須不可欠の資料になる。香坂が『水滸』語彙の研究の中で、接尾辞「～家」を含む語として取り上げている語に「俺家・洒家・自家・誰家・人家」がある。これらについてどう説明しているのかについては、長くなるのでここでは省略しよう。これらの語とともに、唐代以後の「渠家・咱家・他家・我家」の語も紹介している。このことから、「～家」は新概念の漢語とも性格が異なる人称・呼称を表わす語であることがわかった。

香坂⁵⁾は、中国語の「～家」について、『水滸伝』の研究で言及したもの外に「東家・行家・親家・冤家・老人家・男人家・女人家・小孩子家・姑娘家」の例を提示し、「～家」は一般に「人」を表わしていると述べている。また、新興名詞として「作家・画家・専家・思想家・政治家・觀察家」の例を挙げている。これは『分類語彙表』で示した語と同じであるが、新しく出来て現代に通じる語は、主に職業と関係するものである。

小田切文洋の『唐話用例辞典』⁶⁾にも、「～家」の語があちこちで紹介されている(用例は省略)。

東家 [名詞] 主人。古代、客は西側に、主人は東側に座ったことからくる。**大家** [代詞] みんな。みんな。**管家** [名] 官僚や地主などの番頭。執事。**行家** [名] ① (元手のある)商売 人。② 玄人。専門家。**合家** [名] 家じゅうの人々。**渾家** [名] 妻。元は家中の意。妻の意の例は、元・明の小説・戯曲に見える。**火家** [名] ① 店員。＝‘伙計’。② 仲間。＝‘伙計’。**伙家** ＝‘夥計’。**奴家** [名] 若い女性の自称。**洒家** [代] おれ。わし。『水滸伝』では、関西(陝西省・甘肅省一帯)出身の魯智深と楊志だけが用いる。**冤家** [名] ① かたき。② 憎からぬ人。多く恋人。**咱家** [代] 私。**自家** [名] 自分自信。[代] わたし。

3) 同上、pp.93-95

4) 香坂順一(1987)『《水滸》語彙の研究』光生館、p.8、p.13、p.23、p.68、p.90

5) 香坂順一(1983)『中国語の単語の話—語彙の世界』光生館、pp.96-97

6) 小田切文洋(2008)『江戸明治唐話用例辞典』笠間書院

この用例辞典は唐話辞書と幾つかの作品を取り上げているだけなので、やはり全般的な流れは分からない。この用例には、香坂がいうような「身分」や「職業」と関係する語もある。ただし、現代中国語では「大家」を除きあまり用いられていない語である。小田切文洋の用例集も、どういう語が中国俗語であるのかという指標として有益である。上の例は、『漢語大詞典』にも全て収録されている。

岡田袈裟男は、日本の近世に流行した唐話学の資料として特に『忠義水滸伝』、『忠義水滸伝鈔解』、『水滸伝訳解』のような『水滸伝』関係の資料を調べて、「咱家・洒家・奴家」の例を載せている⁷⁾。岡田はさらに、近世に中国俗文学を翻訳した和訳本に現れている「人の表現」を取り上げているが、その中には「渾家・媽家・大家・一家・合家」⁸⁾があることを提示している。ただし、これらの例は分析というよりは、通俗和訳文に見られる人を表わす例の諸相を提示したもので、多様性があることについては大いに参考になる。しかし、日本文学への影響についての言及はない。鈴木丹士郎は読本(『八大伝』)に現れている中国俗語の例を一つずつ紹介しているが、その中では「火家・洒家」⁹⁾の2語が簡単に紹介されている。遠藤好英が挙げた近代文学に現れている中国俗語由来の「～家」の語は「自家」¹⁰⁾のみで、「われ・じぶん・うち」と読んでいる例を一つずつ紹介している。これらの研究は一例のみを提示しているので、やはり日本文学における全貌が分からない。

近世や近代の日本文学には、唐話学による「～家」の語の受容及びその影響が見られたと考えられる。本稿では、どういう語がどのように用いられていたのかという使用実態を調べ、日本文学における中国俗語の人称・呼称の漢字表記を体系化しようと思う。「～家」の一語一語の歴史を微視的に考察することにより、近世・近代人の漢字・漢語使いの一断面をも把握してみることにしよう。

2. 近世・近代を通して見た「～家」の語について

「～家」の語について具体的に述べる前に『漢語大詞典』の「～家」の見出しの2を見ると、「后缀」とあって、「①用在某些名詞后面、表示属于一類人。②方言。用在男人的名字或排行

7) 岡田袈裟男(2006)『江戸の翻訳空間』笠間書院、p.52

8) 岡田袈裟男(2006)『江戸異言語接触』笠間書院、pp.340-350

9) 鈴木丹士郎(1987)「読本の漢字」『近世の漢字とことば』漢字講座7、岩波書店、pp.235-236

10) 遠藤好秀(1987)「近代文学と漢字」『近代文学と漢字』漢字講座9、岩波書店、p.29

后面、指他的妻」との記述があり、『牡丹亭』『紅樓夢』『三里湾』の「人家・伙家」の例が見られる。このことからみると、基本的に「～家」は人の属性を持つ語につき、方言的要素のものもあるということで、口語的な接辞であることがわかる。つまり、中国俗文学によく用いられている語であることを確かめておく。ここでは、「～家」の語の種類が多様であるので、多用されている語を個別的に考察することにする。それから、多用ではないが例が少ない語は、紙面の関係上提示するに止めたい。

2.1 「自家」について

まず、「～家」の語のうち「自家」について見てみよう。「自家」に慣れていない人なら「自分の家」と解釈する人が多いのではないだろうか。勿論、現代日本人ならその意味で用いることが多いだろう。しかし、「自家撞着」のような例から見れば「自分・自己」の意味になり、「自分の家」とは意味が異なっている。今から百余年前には、「自分・自己」の意味で用いられるのが日常茶飯事であった。『日国大』に現れている「自家」の見出しを見ると、

じか【自家】[名]自分の家。自宅。転じて、自分。自分自身。おのれ。じけ。

『授業編』(1783)、『随筆一山人饒舌』(1813)、『文明論之概略』(1875)、『牛肉と馬鈴薯』(1901)

となっている。「自家」そのものは、日本語の歴史としては浅いことが分かる。『漢語大詞典』では、「自家」に「自己」の意味を付与している。

日本の中世末期や近世初期に日本では禅関係の仏教書が流通していたが、そこにも「自家」が用いられている。例えば、

『塩山和泥合水集』(拔遂得勝、寛永3年本、日本思想史大系16)

這般ノ情解ヲ以活句ヲ見バ、自家ノ真宗、地ヲ払テツキン。(p.265)1例

『興禅護国論』(拔遂得勝、寛文6年本、日本思想史大系16)

方に自家の口を開き得て、自家の話を説き得べし。(p.64)2例

の例がそれである。こういうことをみると、近世初期にも「自家」の語が用いられていたといえよう。禅関係の書にも中国俗語が散見されるので、これらにも口語的特性があるもの

と思われる。次は「唐話辞書」の例を見よう。

自家 自信ヲ云 自己 同上 渠 自家 自己『語録字義』(元禄7年)

自家 自分ノコト自己ト同シ自家已事トハ自分ノコトト云コト『語録訳義』(延享5年?)

自己 ヲノレ ワレ ワガテ 自家 同上家ノ字付ケ字ナリ奴家洒家等ノ家ノ字ニ同シ『俗語解』(刊行年間未詳)

自家屋裡去睡 ジブンノ宿ニカヘリテネヨウ『唐話為文箋』(明治写本)

我自家的事多(ゴウツウキヤアテツスウトウ) 我自分ノコト多シ『唐話便用』(享保20年)

自家トハ、ジブント云フコトナリ、自己ト同シ。自家已事トハ、自分ノ事ト、云フコトナリ『字海便覧』(岡島冠山、享保10年)

自家『兩國譯通』

自己^{ジ コ} オノレ、ワレ、ワガテニ。自家^{ジ カ}上に同家字付字ナリ、奴家、洒家ナドノ家ノ字ト同『雅俗漢語訳解』(明治11年)

自家^{ジ カ} ジブン。自己^{ジ コ} 同上。『小説字林』(明治17年)

自家^{ジ カ} ヲノレ、ワレ、ノ如シ『支那小説字彙』(藤井理伯算輯、明治43年)

「唐話辞書」に「自家」が多数現れているが、その意味は「ジブン・ジコ・オノレ・ワレ・ワガテ」のような一人称の意味で用いられていたことが分かる。このことから、「自家」が持つ性格は中国俗語であり、「自分の家」のような意味ではないことが分かる。これは、中国俗文学を和訳した通俗文にも共通している。ここでは紙面の関係上、出典の全例を示すのではなく、読みの異なる例のみを提示することにする(出典は『近世白話小説翻訳集』汲古書院のものである)。

「自家」は、「北方語の“自己”に相当する。“人家”と対照をなしている代詞である。中古の口語に、とくに仏教関係の資料に“自”と“他”を対応させた用法が多く見られる」¹¹⁾としている。また、『水滸伝』における「自家」の意味用法として、「自己」と「我」があるとしている。

又自家^{ジ シン}暗ニ笑テ〜(『通俗繡像新裁綺史』月池睡雲庵、寛政11年、p.319)1例

自家^{ジ ブン}ノ睡^{ネバウ}p.322、6例。自家^{ミツカラ}p.355、1例。自家^{ワ ガ}女兒^{ムスメ}p.395、1例。

11) 香坂順一(1987)前掲書、p.68

又自家^{テマヘ}ノ二婢^{フツノシメト}ヲ呼出シ逢シメテ曰。(『通俗大明女仙外史』滄浪居主人、安永9年、p.96)1例

自家^{ジカ}ノ審剣^{クラ}ト比へ(『通俗忠義水滸伝』岡島冠山訳、宝暦7年、p.223)1例。自家^{ジカ}心事自家^{シンジ}知。(『通

俗醉菩提全伝』碧玉江散人訳、宝暦9年、p.28)3例。他自家^{カレオノレ}ノ寶貝ナル(『通俗西遊記(前編)』岡島

冠山訳、宝暦7年、p.528)2例。又自家^{テマヘ}ノ二婢^{フツノシメト}ヲ呼出シ(『通俗大明女仙外史』滄浪居主人、安永9

年、p.96)1例

所謂通俗和訳本に「自家」が比較的に見られるが、そこには漢語としての「自家」(一人称)の例もあり、また他の漢語読み「ジシン」もある。勿論大部分が訓読みで、「ミツカラ・ワガ・テマヘ・オノレ」の意味を与えている。「テマヘ」の場合は二人称の意味もあるが、ここでは一人称の用法である。本来、日本人に分かりやすく読ませるためには、当時は新語ともいえる「自家」を用いず、「自分・自己」の漢字表記や或は一人称のかな表記で表したらもっとよかつたはずである。しかし、「自家」は中国俗文学で基本的に一人称で用いられていたもので、それをそのまま受け継ぐ形で用いていたと思われる。近世日本人によく読まれていた中国の書にも次のような例が見られる。

小人自家^{ニテン} 去休。(『小説精言』岡白駒、寛保3年、p.1ノ10オ)1例

俚^{ワカシ}ニ着自家^{シンノ}意思^ヲ、(『小説奇言』岡白駒、寶暦3年、p.2ノ9オ)11例

自家^ワ的東西尚無^ヲ福、(『小説粹言』平安癸疑主人訳、寶暦8年、p.2ノ5ウ)10例

自家^{ワガデニ}毒死p.3ノ6ウ、1例。

『小説精言』には「シュクシヨ」の訓を当てているのが特徴であるが、やはり基本的には「自分」系の訓を当てている。外に、自家^{ワレ}『風箏誤傳奇』宮原民平註、大正15年7月、支那文学大観4、p.21)、自家^{ソレガシ}(『風箏誤傳奇』宮原民平註、大正15年7月、支那文学大観4、p.62)、自家^{ワタクシ}(『風箏誤傳奇』宮原民平註、大正15年7月、支那文学大観4、p.92)、自家^{ワレ}(『牡丹亭還魂記』鈴木彦次郎外訳、昭和2年、支那文学大観3、p.5)のように一人称で用いられている例がある。このような影響を受けて、日本人の作品にも援用される。

自家夫人側室(『平安花柳録』快活道人纂定、p.5オ)1例

除^{シテ}了自家的哭號^ヲ、(『海外奇談』鴻濠陳人重訳、文政3年、東北大学図書館蔵本、p.6ノ6オ)1例。自家^{ジブン}p.3ノ5オ、5例

手段^{ニシテ}而自家先墮者歟(『田舎繁昌記二編』松本萬年、明治8年3月、国会図書館蔵本、p.6ウ)1例

自家ノ愚昧(『東京開化繁昌誌』高見沢茂、明治7年5月、明治文化全集7、p.247)6例。自家友

歴縁由(『情天比翼縁』三木愛花、明治17年2月、国会図書館蔵本、p.34)13例。自家の衣着を

投げ、(『東京新繁昌記』服部撫松、明治7年4月、明文全4、p.162)2例。自家^{ジブン}の飯食も常人に
比すれば(『柳橋新誌』成島柳北、明治7年、明文全4、p.12)2例。是レ漁史自家ノ年中行事ナ

リ(『熱海文藝』成島柳北、明治17年7月、明文全4、p.52)2例。将^タニ自家^{ノノロケヲ}痴話^{キハシ}ニ説罷好些。

(『新橋八景佳話』三木愛花、明治16年7月、国会図書館蔵本、p.4オ)10例。酒がいはする

自家^{みのうへばなし}晤譚^シに(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集84、

p.50)1例。和州^{やまとめぐり}順歴^うして自家^{うち}へ回れば、旧地^{めい}勝景^{しよこせき}を思ひ出^だして、(『麻疹戯言』式亭三馬、享
和3年、中本型読本集、p.68)1例

近世には、色々のジャンルにわたって中国俗語が用いられている。しかし、「自家」に限って言えば、あまり用いられていない。多くが「日本人作白話小説」や「繁昌記」、「漢文小説」の例であるが、音読みの「自家」や「ジブン」の例があり、訓読では「テマヒ」が見られる。基本的に音読みが多いのは、すでに一般の読者の世界にも「自家」の語が馴染んでいたためと思われる。ただし、このようなジャンルには「自家」があまり用いられていない。また、中国俗文学の影響を多く受けている馬琴の読本にも殆んど見られないのが特徴である。読本のわずかな例として、「みのうへ・うち」の意味で用いられている例がある。現代日本語のように「自分のうち」も用いられていたことが分かる。

近代になると、状況は完全に変わっている。前にも例として取り上げたが、明治期の「唐話辞書」や「繁昌記」の一部に「自家」が現れていた。近代以前の『文明本節用集』、『書言字考節用集』のような漢語辞書には、「自分」のような例はあるが「自家」の例は見られなかった。しかし、明治期の「漢語辞書」には多くの例が見られる。

自家^{ジカ} ワレラ (『音訓新聞字引』萩原乙彦、明治期漢語辞書大系21、明治9年、p.419)

自家 オノレノイヘ。(『新編漢語辞林下』山田美妙、明治期漢語辞書大系57、明治37年、p.303)

自家 ジカ ワガイヘ (『新撰漢語字林大成』橋爪貫一、明治期漢語辞書大系22、明治9年、p.74)

自家 オノレノスミカ(『新撰伊呂波節用』武田福蔵、明治期漢語辞書大系36、明治12年、p.512)

明治期の漢語辞書に見られる主な特徴は、「自家」に「オノレ」という一人称の訓を当てている辞書は一つしかなく、大部分が「オノレノイヘ・ワガイヘ・オノレノスミカ」といった「自分の家」のような、純粹の一人称ではない意味で用いられていることである。勿論、「自分オノレ」(『新編漢語辞林下』山田美妙、明治期漢語辞書大系57、明治37年、p.305)のように「自分」といった語も多く載せられている。しかし、近世の文学作品においては一般的に一人称として用いられていたのとは異なり「自分の家」の系統に変わっていたことは、意味の変化があったことを物語っている。「自分の家」の意味として登録されているものには、『漢語伊呂波分大全数字引』(藤田善平、明治期漢語辞書大系39、明治12年、p.245)、『文明いろは字引』(片岡義助、明治期漢語辞書大系33、明治10年、p.195)、『漢語いろは字典』(只木小五郎、明治期漢語辞書大系44、明治20年、p.288)、『改正増補漢語新画引大全』(片岡賢三、明治期漢語辞書大系45、明治20年、p.84)、『漢語活益字典』(清水常太郎、明治期漢語辞書大系46、明治25年、p.409)、『萬民宝典漢語作文字引大全』(梅の家薫、明治期漢語辞書大系47、明治26年、p.280)、『漢語字典大全』(甲斐山久三郎、明治期漢語辞書大系47、明治26年、p.385)がある。

「自家」の意味の変化があったにも関わらず、一人称としての意味用法は近代の文学作品にも依然として受け継がれている。この「自家」の例は実に多く、また多数の作家により用いられているので、ここでは種々の読みを一例ずつ載せすることにする。

鶴は自家^{うち}の近所に住んでゐた美しい優しい可憐な女である。(『お目出たき人』武者小路実篤、明治43年月、現代日本文学全集19、p.5)2例

国家の安危より、自家^{くに やまがやみ}の存亡^{むねなひ}に及ぼし、(『五九節操史』松岡亀雄、明治14年2月、国会図書館蔵本、p.2ノ16)1例

「自家」に対する意味として、上の例のように「自分の家」のような意味も多数用いられている。外に、「自分が所属している所・妻・旦那」の意味もあるが論外にする。また、「自家の

茗^け茶^{ちん}ぼうめのように「自家の+人」の形も多い。この「自家の+人」は、「自分が所属しているところ・もの」の意味であろうが、「人」と接続する場合には「人称」との近接性を保っているように思われる。近世の資料にはあまり用いられていなかった「自家^{うち}」の読みや意味が近代には多く用いられ、日本ではその意味用法の広がりを見せていたといえよう。中国俗文学では主に一人称として用いられているが、その例を幾つかあげると次の通りである。

其感^{かん}溺^{じやく}は即ち自家の感^{かん}溺^{じやく}にして(『文明論之概略』福沢諭吉、明治8年3月、岩波文庫、p.35)15例
最早^{もはや}自家^じの所有^{しやうりゆう}ならねば夫^そは同^{どう}氏^しの随意^{ずい}たるべしと～(『冠松真士夜暴動』武田交来、明治13年10月、明文全2、p.226)1例

且^かつニコラスに就^{ついで}て自家^じの鎧^{よろい}冑^{けう}一^{いつ}輛^{りやう}を献^{けん}し、(『五九節操史』松岡亀雄、明治14年2月、国会図書館蔵本、p.2ノ30)7例

商売上の三字を以て拙^{つたな}くも自家^{おのれ}の非難^{ひなん}を免^{のが}れんと～(『憂喜世の夢』斎藤緑雨、明治19年8月、斎藤緑雨全集5、p.102)1例

自家^{おの}が足元の(『あがりがま』幸田露伴、明治27年10月、露伴全集8、p.359)

それを昇^{あが}は恰^うも自家^{ぬひ}一個^{ひとり}の課長のやうに課長課長とひけらかして～(『浮雲』二葉亭四迷、明治20年6月、明文全17、p.46)1例

自家^{われ}川島武男が一身の死活浮沈、奚^{なん}ぞ問ふに足らむや。(『不如帰』徳富蘆花、明治33年1月、蘆花全集5、p.173)1例

自家^{みづから}穿^はぎたりし白虎^{びやくと}の生皮^{いきがは}もて造^{つく}れる櫛^{はかま}を～(『新桃花扇』尾崎紅葉、明治23年10月、紅葉全集2、p.438)1例

近代の作品には「自家」の例が実に多く、ほぼ全ての作家が用いていたと言っても過言ではないくらいである。その読みのうち多数を占める音読みの「自家・自家^{ジカ}」については使用した作家の名前は省略するが、明治期には「自家」が漢語として定着していたといえよう。松岡亀雄のように「自家」に「ジブン」という別の漢語読みをしているものもある。このような表記は二葉亭四迷の作品にも見られるがそう多くはない。和語読みの「自家^{おのれ}」の例は、坪内逍遙・櫻田百衛・長田秋濤・矢野龍溪・尾崎紅葉・泉鏡花・鯖江小漁の作品に見られる。外に、

特異な一人称の訓としては、「おの・うぬ・われ・みづから」のような例もわずかに見られる。

一人称には、和語・漢語、或は漢字表記など多様であるが、近世・近代には中国俗語由来の「自家」も重要な漢字表記の一つであったことが分かった。

2.2 「大家」について

中国俗文学に多用されているものに「大家」がある。「大家」は、現代中国語でも「大家好麼」(皆さんお元気ですか)のように挨拶言葉として用いられている。この挨拶言葉は現代日本語としては用いられていないが、中国語に少々関心を寄せていれば、普通に見掛ける語である。日本では一般的に「大家」という語を見た場合、「大きな家」とかある分野の「大家」のことを思い浮かべるだろう。多義語である「大家」はどういう意味を持っているのかを『日国大』を通して見てみよう。

たいか 【大家】[名]①大きな家屋。大屋(たいおく)。

②富んだ家。金持ち。また貴い家柄。身分の高い家柄。たいけ。『太平記』(14C)

③その道で特にすぐれた人。巨匠。『正法眼蔵』(1231-53)～『草枕』(1906)

④みんな。皆々。「空華日用工夫略集」(1385)

⑤しゅうとめの称。

⑥中国古代の女子の尊称。

「大家」は比較的早く日本に伝えられた語であるが、本稿では④の「みんな・皆々」の意味について詳しく考察する。『漢語大詞典』の「大家」の(5)に「5.众人；大伙儿」があり、「みんな」の意味としても用いられている。『日国大』の「空華日用工夫略集」は禅僧空華の日記であるが、そこに「みなさん」の意味として用いられていた例が既に日本の中世に見られる。当時の禅僧は中国の口頭語で書かれていた書籍を読んでいたもので、その影響を受けていたものと考えられる。この時代はまだ中国俗文学を読む時代ではなかった。では、日本の近世近代の資料を通して「大家」の歴史的展開を見てみよう。以下は、「自家」と同様の形で考察することにする。

大家 ヲシ出シタコトヲ云大家商量ナドノ類。唐話纂要ニ大家ヲミナミナト譯ス衆皆ノ二字ヲミナミナト訳ス『語録訳義』(延享5年?)

合家 ミナミナ。大家 同。『訳通類略』(明治年間写本)

大家 ミナミナ 衆皆 同上。大家都來了 ミナミナスベテキタレリ『唐話為文箋』(明治年間写本)

^{ダアキヤア}大家(ミナミナ) 『兩國譯通』(刊行年間未詳)

大家 ミナミナ。大家不則声 ミナミナタマレ 『劇語審譯』(写本)

^{ダアキヤアライ}大家来 ミナキタレ 『南山考講記』(明和4年)

大家 ミナミナ イヅレモ。大家 双方ナリ皆々ト云コト。『中夏俗語彙』(享和2年)

大家 独断天子ノコト 『徒杠字彙』(安政7年)

^カ大家 メイメイ 『小説字林』(明治17年)

^カ大家 ミナミナ。 ^カ大家 アニキ 『雅俗漢語訳解』(明治11年)

大家都説出来ノ大家ハ、^{ミナ}皆ノ人ト、云フコトニシテ、衆家ト同シ。古語ニ^{コウジハ ミナシル}好事大家知ト云

^ク句アリ 『字海便覧』(岡島冠山、享保10年)

大家 オオシンダイト訳ス。小家 初心ナドト訳ス。大家 ソウゾウト訳ス。『諸録俗語解』(中国白話研究資料叢刊之一、1961)

^{タイ カ}大家 ミナミナト云フコト 『支那小説字彙』(藤井理伯算輯、明治43年)

^{ミナミナ}台家 『魁本大字類苑』(谷口松軒編著、明治19年)

^{ダアキヤライ}大家来 皆キタレ 『唐話便用』(享保 20)

^{ダアキヤア}大家 ミナミナ。 ^{チヨンキヤイ}衆皆 同上。大家都來了(ダアキヤアトウライリヤウ) 皆々。スベテ来レリ。『唐話算要』(享保3)

^{ダアキヤライ}大家来(ミナコイ) 『遊焉社常談』(石川安貞、近世中期)

^{ダアキヤア}大家 各ミナミナ 『忠義水滸伝解』

大家捏ニ^ノ兩把汗一 各々兩手ニ汗ヲニギルナリ。我^{カラ}們大家 我輩皆ノ者トモト云コト 『水滸伝抄訳』

大家 ミナミナ。^{ミナミナ}全家(ノコラス) 大家ト同 『水滸伝訳解』

かなり多くの唐話辞書に「大家」の例が見られ、当時は難語として取り扱われていたと思われる。その訓は、殆んどが「ミナミナ」となっている。たまに「ミナ・メイメイ」が見られる。特異な訓としては『雅俗漢語訳解』に「アニキ」があるが、「大哥」(アニキ)の誤訳と思われる、他には見られない。『諸録俗語解』にも、形は「大家」であるものの意味が全く異なっ

いるものがあるが、基本的には「皆さん」系の意味を与えていることが分かる。主な形は、「大家来」のように会話的になっている。また、「大家」と似ている「合家・全家」を同義として載せているものもある。このように、中国俗文学や『唐話使用』『唐話算要』のような会話書にも登録されている典型的な俗語であることが分かった。当然ながら、中国俗文学にも用いられていると思われる。

這千兩黃金、弟兄^{ノアツラン}大家^{ミナミナ}該^{ヲアツラン}ニ五百兩一、(『小説奇言』岡白駒、寶暦3年、p.3ノ29ウ)1例。大家^{ミナミナ} p.356、1例。

大家^{ミナミナ}歎息^シ了一回、(『小説粹言』平安癸疑主人訳、寶暦8年、p.2ノ5ウ)9例

西湖是俺^ワ大家^レ受用的^{ラタノシム}。(『牡丹亭還魂記』鈴木彦次郎外訳、昭和2年、支那文学大観3、p.268)多例

清明近。遊人閑ニ好風光一。大家^{ミナ}歛笑^{ミナ}。(『風箏誤傳奇』宮原民平註、大正15年7月、支那文学大観4、p.31)5例

大家^{ミナ}洗耳^{ナキタマハ}。(『桃花扇』塩谷温註、大正15年7月、支那文学大観6、p.3)29例。大家^{ミナミナ} p.25、18例。

大家^{ミナ}(『五色石』服部撫松訳、明治16年、国会図書館蔵本、p.1ノ42オ)7例。大家^{ミナミナ} p.3ノ4オ、1例。

大家^{ミナミナ}(『勸懲繡像奇談』服部撫松、明治16年、国会図書館蔵本、p.1ノ2)2例

日本に伝えられた中国俗文学にも、基本的に「大家」が多用されている。「ミナミナ・ミナニ・ミナ・ヲノヲノ」のように、二人称代名詞としての役割を担っている。唐話辞書や中国俗文学にその例が多数見られるので、それを翻訳したものにも現れると思われる。

大家^{ミナミナカレ}他^{タイキヨトリタケ}ヲ擡舉^{スル}心アリ。(『通俗赤繩奇縁』近江贅世子訳、宝暦11年4月、p.43)5例

實^{ジツ}ノ報^{ホウ}ヲ得^エガタク。大家^{ミナミナヤス}寧^ニキ心モナカリケルガ。(『通俗隋煬帝外史』碧玉江散人訳、宝暦9年5月、p.372)59例

大家^{ミナミナ}。(『繡像通俗金翹傳』藤屋弥兵衛訳、宝暦13年1月、p.169)43例。(『通俗孝肅傳』近江贅世子訳、寶暦11年、p.505)2例。(『通俗繡像新裁綺史』月池睡雲庵、寛政11年、p.398)1例。(『通俗醒世恒言』宿屋居主人、寛政元年、p.82)1例。(『通俗西遊記(前編)』岡島冠山訳、宝暦7年、p.265)15

例。大家(『通俗忠義水滸伝』岡島冠山訳、宝暦7年、p.466)2例。大家(『通俗平妖傳』平安本維芳訳、享和2年、p.155)2例。大家大家(『通俗西遊記(後編)』岡島冠山訳、宝暦7年、p.461)3例。大家p.176、2例。大家大家p.410、2例。

中国俗文学の翻訳にも「大家」がそのまま用いられていることが分かる。『通俗隋煬帝外史』、『繡像通俗金瓶傳』にはかなり多く用いられていて、好まれた語であるといえよう。音読みの例はなく、「ミナミナ」が基本的な読みとなっている。外に、「ヲノヲノ・ミンナ」がある。近世中盤以降、「大家」の語は「ミナミナ」の意味として、作家は勿論、読者の世界にも浸透していたと思われる。このような現象は、日本人が書いた文章の世界にも自然と広まっていく。

大家俳笑、官威^ノ法律^ヲ、便是^レ玉皇大帝、(『演義俠妓傳』烏有道人、p.1ノ下)1例

勿^レ招^ニ大家之^ヲ俳笑^ヲ。(『北里懲咎録』道凹先生著、明和5年5月、洒落本大成4、7才)1例

大家の飯^{あにき}卿^{ききやう}を俵^{まち}いひぬp.194、1例。大家^{たいか(さま)}p.108。大家^{みなみな}p.256、1例。(『忠臣水滸伝』醒世老人山

東子、寛政11年、和泉書院)。大家^{みなみな}(『忠臣水滸傳』醒世老人山東子、享和2年、近世白話小説翻訳

集、p.140)1例。大家^ノ情愿^{モノノ希望}(『海外奇談』鴻濠陳人重訳、文政3年、東北大学図書館蔵本、p.4ノ5

才)1例。大家^{ニシ}従和^{ヲボロイ}。(『京都明治新誌』松岡彦二、明治10年6月、国会図書館蔵本、p.38才)1例。

大家^ハ則^ニ(『江戸繁昌記』寺門静軒、天保3-7年、東北大学図書館蔵本、p.4ノ9ウ)3例。大家^{ヲボロイ}(『繁昌後

記』寺門静軒、明治10年11月、東北大学図書館蔵本、p.1ノ10ウ)7例。大家^{イナリモサマ}一斉に、(『西京伝新

記』菊池三溪、明治7年12月、新古典文学大系1、p.287)4例。大家(『情天比翼縁』三木愛花、明治

17年2月、国会図書館蔵本、p.49)3例。大家^{ミナミナ}将^チニ起来^シ一場^ル大笑^ノ。(『新橋八景佳話』三木愛花、

明治16年7月、国会図書館蔵本、p.10ウ)3例

日本人作白話小説や近代の繁昌記などには、多数ではないが「大家」が多様な読みで用いられている。翻訳物では「ミナミナ」のような画一的な訓読みであったが、小説や戯作では、内容や読者の目に合わせるような形で多様な読みをしていたと思われる。内容が俗世間で繰り広げられる内容を主としているので、所謂標準系の「ミナミナ」もあるが「テンデ

ノ・テンドノ」の連体修飾形もある。これらは「各自」の意味である。また、多くの数を表わす「オホゼイ」の意味を与えたりもしている。無訓の場合もあるが、同じ作家が他の作品では訓読みをしているので、作品は異なっても同じ意味で用いられていたと思われる。特異な意味としては『忠臣水滸伝』で「大家」に「アニキ」という訓を当てている例がある。「大家」には「アニキ」の意味はないのだが、類義の「大哥」と音読みは同じであるので、そこ引張られたものと思われる。また、他には「みなみな」と訓じる例もある。『西京伝新記』の例は、敬語的要素も加味されるなど多様な読みをしていた。この「大家」は、読本の世界にも見られる。

ことばらか は、は、ご こうでう
言詳なる大家の口状、大かたはこころを得たり。(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本2冊、p.278)3例。大家(『八犬伝』4冊、p.298)20例。大家(『八犬伝』4冊、p.265)5冊69例

みなみなすべ
大家都て心得たる歟(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集84、p.317)7例

あ、た、り むらびと つげ みなみなおどろ さはぎたち
四隣の村人に報しかば、大家驚き譟立て、(『開巻驚奇俠客伝』曲亭馬琴、天保3年一天保6年、新古典文学大系87、p.413)71例

馬琴のあらゆる作品に用いられているわけではないが、『八犬伝』には多くの例が見られる。すべてと言っているほど「みなみな」の読みで用いられている。ここには、「大家」に「ははご」という異様な訓もあり、独特な意味を与えているものもある。馬琴は、同じ接尾辞「～家」である「自家」は殆んど用いなかったのに「大家」は多用していることをみると、作者により語の好みがあったものと思われる。この「大家」は、読本の世界には多数見られるが、他のジャンルでは見られない。全般的に見ると、「大家」は近世に流行し日本人の間に広まっていたといえる。

近代における事情はどうなっているのかを見てみよう。漢文戯作では明治期の作品に用いられていたことは前言した通りである。近世以前の漢語辞書には「大家」の例は見られない。しかし、近代の漢語辞書には多くの例が見られる。

ダイ、カ
大家 ミナミナ (『雅俗漢語字引大全』中田幹母、明治期漢語辞書大系43、明治18年、p.256)

^{タイ、カ}
大家 イヘガラ (『画引新撰漢語字引大全』近藤元粹、明治期漢語辞書大系26、明治9年、p.100)

^{タイ、カ}
大家 オオキナイヘガラ (『増補漢語字類』莊原和、明治期漢語辞書大系27、明治9年、p.55)

^{タイ、カ}
大家 ヨキミブン (『明治伊呂波節用大全』大月疇四郎、明治期漢語辞書大系35、明治11年、p.336)

^{タイ、カ}
大家 トミサカヘルイヘ。オホキナツクリノイヘ。イヘガラノヨロシイヘ。ヨニキコエタイ
イヘ。ヨニキコエタ人。(『新編漢語辞林中』山田美妙、明治期漢語辞書大系56、明治37年、p.84)

明治期における多くの漢語辞書のうち、『雅俗漢語字引大全』の例に中国俗語の意味である「ミナミナ」の意味を与えている例は『明治いろは字引大全』だけである。大部分が「イヘガラ」系統の意味を提示している。このことを考えてみると、明治期以後は「大家」が「ミナミナ」の意味よりは「イヘガラ・ヨキミブン・学芸にすぐれたる人」のような意味で使われることが多くなり、現代日本語における意味に変わって行ったのではないかと思われる。外に「イヘガラ」系の辞書としては、『大全漢語便解』『漢語いろは字典』『公益漢語伊呂波字引』『漢語活益字典』『明治漢語字典』『故事熟語字典』『漢語故諺熟語大辞林上』『漢語字彙上』『作文新辞典』『外史訳語』がある。

^{ふんぜん} ^{のべ} ^{みなみなたれ} ^よ ^み ^ひ ^{ごろ}
憤然として演けるを大家誰かと能く見れば日来～(『自由廼征矢』井上勤訳、明治17年9月、明治初期翻訳文学選、p.76)2例

^{おのおの} ^{ざんげ} ^{みなみな} ^{ひざま} ^{われ} ^{ひと} ^{ころ}
「各自懺悔したまへトいへば大家跪つき「儂は人をば殺したりト～(『仏乱余聞』佐々木邦訳、明治18年11月、明治翻訳文学全集24、p.84)8例

^ま ^{このたま} ^{さかな} ^{みなみな} ^{いづい} ^と
先づ此玉を下物に大家一酔を取るべし(『文明花園春告鳥』服部誠一、明治21年1月、リブリ
ン
ト日本近代文学96、p.280)17例 後編8例。

近代になってからの「大家」の使用は、近世に比べて非常に少なくなっている。勿論、漢語辞書の意味のような例は多数あるが、中国俗語の意味である「みなみな」の例は、管見では上の例が全てである。上の3作品は、他の中国俗語も多数含有されている作品である。明治期に入ってから漢語辞書の例から伺われたように極限られた一部の漢文戯作や普通の文学にのみ現れていることを考えると、この語は明治期に入ってから間もなく死語になりつつあったものといえよう。

2.3 「奴家」について

「奴家」は、「奴」から連想されるように好いイメージのようにとは思えない。現代日本語では用いられていない語で、やはり中国俗語である。この語は、『日国大』に登録されていないほどに、現代日本人にはなじみのない語である。『漢語大詞典』には「旧时女子自称」とあり、中国口語として用いられていたものである。では、文献を見ながら、どのような意味用法を持っていたのかを具体的に見てみよう。

奴家 婦人自称奴家ト云。『俗語解』

奴家 女自称。『記通類略』

奴家 婦人自称云ニ奴家^カ。儂家^カ 女子自称ノ語、奴家ト云ヒ妾ト云ニ等シ。『雅俗漢語訳解』

奴家^{ド カ} ワタシ。『小説字林』

奴^{ヌウ} 奴家トモ云如ノ自称也。折殺奴家 奴家ハ婦人ノ自称ナリ折殺ハイタミ入タト云詞ナリ。『忠義水滸伝解』

奴家 婦人自称謙ナリ奴一字モ用。『水滸伝訳解』

折殺奴家 ワレヲヲガミコロスカ。奴家平生快性 ワレヲハツネニキガミジカフテ。『忠義水滸伝』

奴 婦人自称奴字。『忠義水滸伝考』

まず、唐話辞書に見られる意味を見ると比較的多く、「奴家」の例が見られるが、その使用は女性に限られていることが分かる。女性の「自称」を表わす語で、「わたし」の意味として用いられている。香坂順一は、『水滸伝』を資料とした研究では「奴家」について言及していない。しかし、『水滸伝』から抽出した唐話辞書には「奴家」についての説明が多い。また、『中國哲學書電子化計劃』の検索の結果、『西遊記』、特に『金瓶梅』には使用例が多く見られる。このことから、俗文学で用いられる語であることが伺われる。また、『雅俗漢語訳解』には「儂家」の例が見られ、「奴家」と同意であることを示している。『漢語大詞典』には「(1)自称。犹言我。家、后缀。(2)女子自称。犹言奴家。(3)旧时女子称自己的家」とあり、(2)の意味から「奴家」と同様に女性の自称として用いられていたことが分かるだろう。この語も「宋・元」の資料に見られる。

この「奴家」は、「四大奇書」の外に日本に伝えられた資料にも用いられている。

回道^{シテ フ(ヘントウ)}。奴家^{ヌカ}自来最^モ怕^ルニ生人^{ヲ(イヤナリキヤクシンナルヒト)}。(『小説精言』岡白駒、寛保3年、p.2ノ14才)13例

説ニ那里話^{ノヲヤコヲ(ハルルコト)}一、奴家^{サタダン}也是儒門之女、(『小説奇言』岡白駒、寶曆3年、p.3ノ10才)1例

又無^{ケルシミヌシ}苦主^{スデ}一、奴家^{サタダン}捨^{リシ}得^ヲ売^リ尽^リ田^リ産^ヲ一、(『小説粹言』平安癸疑主人訳、寶曆8年、p.5ノ19ウ)1例

奴家^{サタダン} (『補春天伝奇傍訳』石埭居士訓訳、明治13年2月、東北大学図書館蔵本、p.第二駒4)11例

奴家^{サタダン} (『補春天伝奇傍訳』石埭居士訓訳、明治13年2月、東北大学図書館蔵本、p.第三駒9)1例

奴家^{ワタクシハ}鄭^ハ妥娘。(『桃花扇』塩谷温註、大正15年7月、支那文学大観6、p.57)20例。奴家^{ワラハハ}p.148、1例。

奴家^{ワレ}p.21。

奴家^{ワレ}約^{サソヒ}ニ定^シ戚公子一。(『風箏誤傳奇』宮原民平註、大正15年7月、支那文学大観4、p.62)5例

美娘道。如今奴家^{ワレ}要^レ從^レ良。(『今古奇觀』宮原民平註、大正15年7月、支那文学大観11、p.100)3例

近世に施された訓読文では「奴家」に「ワタクシ」という丁寧な訓を与えているが、大正期の他の作品には荒い形の「ワラハ・ワレ」もある。『補春天伝奇傍訳』には同じ意味の「奴家」、中国俗文学には女性向けの人称代名詞として「奴家」が用いられていたことが分かった。

必^{ワシ}奴家^ヲ們^ヲ看^ミニ来^リ玉^ヒタルナラン。(『繡像通俗金翹傳』藤屋弥兵衛訳、宝曆13年1月、p.147)10例。奴家^{ワタクシ}p.160、2例。奴家^{ワタクシ}p.188、3例

奴家^{ドカ(ワタクシ)チチハハ}爹^ハ媽^ハヲ拜^ハシ別^ハテ門^ハヲ出^ハ。(『通俗赤繩奇縁』近江贅世子訳、宝曆11年4月、p.122)1例

奴家^{ワレ}(『通俗古今奇観』淡斎主人訳、文化11年、p.519)7例。奴家^{ワレ}(『通俗繡像新裁綺史』月池睡雲庵、寛政11年、p.411)1例

通俗和文では多くの作品に用いられてはいないが、「奴家」の例が見られる。ここでは、より俗な表現である「ワレ」系になっているのが特徴である。『繡像通俗金翹傳』には、「ワタクシ・ワタシ・ワシ」のようにその内容に合わせた読みをしている例もある。わずかながらも、すでに近世の一般読者は「奴家」という語に接していたといえよう。このような現象は、日本人作白話小説や近世・近代にかけての漢文戯作・漢文小説にも受容されている。

相公老爺、容^ヲ奴家^ハ平^シ生^ス。(『演義俠妓傳』烏有道人、p.6ノ上)1例
トノサマ イレ玉ヘモクコト サタダン

奴家進^{メリ}階^ニ。請通^フ一^{セヨ}声^ヲ。(『四鳴蟬』亭亭亭逸人訳、明和、p.4ノ下)1例。奴家p.6ノ下、1例

奴家^リよき機械^ヲを見て(『忠臣水滸伝』醒世老人山東子、寛政11年、和泉書院、p.41)21例

連^ニ奴家^ヲ真箇^ニ想殺^ス了、(『海外奇談』鴻濛陳人重訳、文政3年、東北大学図書館蔵本、p.6ノ6オ)27例

卿十分調弄^{セヨ}。奴家輩^ヲ之無塩有^ニ何痴漢^ヲ。(『京都明治新誌』松岡彦二、明治10年6月、国会図書館蔵本、p.35ウ)2例

奴家之與^ニ隣住兄行^ニ相昵^ヒ。(『大阪繁昌雜記』奥沢信行、明治10年9月、国会図書館蔵本、p.10オ)11例

奴家原生^ト都下^ニ性惡^ム喧雜^ヲ。(『江戸繁昌記』寺門静軒、天保3-7年、東北大学図書館蔵本、p.4ノ13)5例

娘道奴家嘗賽^テ功德院^ニ聴^シ説法^ヲ。(『繁昌後記』寺門静軒、明治10年11月、東北大学図書館蔵本、p.1ノ12オ)6例

阿福道奴家称^フ時藏^ノ者^ハ。(『銀街小誌』槎盆子、明治10年3月、明治文化全集8、p.391)16例。
奴家^{わたし}p.395、1例

婆々有^ハ這事^ト奴家^ハ是野花樹柳縦令^ヒ。(『情天比翼縁』三木愛花、明治17年2月、国会図書館蔵本、p.35)5例

真個羨^ニ殺^{スト}奴家^ヲ。(『新橋八景佳話』三木愛花、明治16年7月、国会図書館蔵本、p.3ウ)27例

同じく、日本人作白話小説、漢文戯作に「奴家」の例が用いられている。このジャンルは俗世間の世相を反映しているものであるが、「奴家」に対しての訓は「ワタクシ・ワタシ」の謙譲の意味で読まれている。三木愛花の漢文小説には、珍しく「ドカ」の音読みもある。いずれも登場人物は女性で、中国本来の用法を日本でもそのまま用いていることが分かる。この現象は、読本の世界でも同じように見られる。

那奴が身には寸鉄なく、奴家^{わたし}が持^テ這短刀^ノを、その折はやく捐^スしかば、(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年—天保13年、岩波文庫本4冊、p.275)6例

現^げいはれるれば、奴家^{わたし}も亦^モ、親胞弟兄^ノの羞^{はぢ}をし思^{おも}はで、(『八犬伝』8冊、p.119)10例

そは素よりのことながら、^{もと}奴家^{わらは}は^{このごろ}屬日一ち日も、～(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集84、p.90)31例。新編日本古典文学全集85、20例。

初て^{はじめ}奴家^{わらは}に^{ときしめ}説示して、「俺^{われ}と那人^{かのひと}とはかくの^{ごと}如く、～(『開卷驚奇俠客伝』曲亭馬琴、天保3年一天保6年、新古典文学大系87、p.36)105例

是^{これみな}渾過世^{ぐせ いんぐん}の因縁^{いんえん}にして、^{か ひ}甲斐^{わらは}なき^{こ うま}奴家^はが子^こと^{うま}生れし^{はくめい}こそ^{はくめい}薄命^{はくめい}なり。(『高野雉髪刀』小枝繁老人、文化5年、中本型読本集、p.286)13例

奴家^{わらは}此^{この}地方^{ところ}に^{ひさ}旧^{すみ}しく住^すは^こべれば、^{こもやま}此山^{なになに}には^{いふ}何々^{いふ}あると云はよくしりぬ。(『催馬楽奇談』小枝繁、文化8年1月、新日本古典文学大系80、p.206)33例。

馬琴だけでなく、小枝繁老人、小枝繁の読本にも見られ、比較的多用されている。このことを見ると、近世の文学作品の諸ジャンルにわたって「奴家」が用いられていることが分かる。ここにも、「奴家」の使用は全て女性である。音読みの例はなく、いずれも「わらは」の訓を与えている。近世には、女性も「わし・われ・わらわ」のような語をよく使っていたことも伺われる。

「奴家」は、やはり読本の世界にも浸透していて、漢字表記の多様性を示している。通常の「わたし」系の漢字表記は「私」が大部分であり、「妾」も多く見られる。これらの表記以外に中国俗語である「奴家」のような今の目で見れば特殊な表記が多用されていることは、それだけ中国俗文学の影響があったことの裏付けになるだろう。

では、近代の作品ではどうなっているのだろうか。繁昌記や漢文小説にも見られ、明治初期に「奴家」が用いられていたことがわかった。まず、漢語辞書の場合を見てみよう。

^{ド カ}奴家 フジン自称(『雅俗漢語字引大全』中田幹母、明治期漢語辞書大系43、明治18年、p.233)

「奴家」は一般人には普及していないらしく、唐話辞書と異なり、漢語辞書では『雅俗漢語字引大全』に見られるのみである。書名から見て「俗語」も含まれている特殊な辞書であるので、漢語辞書にはないといっていいぐらいである。その影響もあつてか、『日国大』の見出し語にも登録されていない語である。こういうことを考えると、全く漢語的意識はない語であつたと思われる。『普通漢語字引大全』(明治8年)には^{ド カ}「奴下 シモベ」とあるが、発音は同じながら意味が異なる。「奴家」は、近代の文学作品に少々見られる。

其金又是^{どげ}奴家^{ごしつ}ノ誤失スル所ナリ(『鴛鴦春話』和田竹秋、明治13年2月、国会図書館蔵本、p.1ノ9)1例

わらは^{おそば}が身側を離れず^{ある}居と。思^{おぼ}して浮色^{うはき}は仕給ひそ。(『西の洋血潮の暴風』櫻田百衛、明治15年6月、明文全5、p.18)1例

ナニアノ^{わたくし}奴家^{もつ}が持^{まも}て参^{ます}り升^{あが}からよう御座^{ござ}イ升^{ます}(『後開榛名の梅が香』三遊亭円朝、明治18-22年、円朝全集2、p.161)4例。

幾萬の群衆尽く是れ^{どなか}儂家^{ひんせう}の一顰笑に死活する徒、(『無絃琴』高山樗陰、明治35年8月。明文全83、p.96)3例。

近代の文学作品では、「大家」と同様、極わずかの作品にしか見られない、特に明治期の文学作品における漢字表記としては非常に珍しい語であったと思われる。これらの表現主体は「女性」であり、少ない用例であるにもかかわらず「どげ・わたくし・わらは」のように多様な様相が見られる。特に、音読の例「どげ」は「どか」の別読みであるが、近世の通俗和訳本、唐話辞書、希に近代の漢語辞書に「どか」の例があるので、『日国大』に登載すべきであると思われる。

また、明治期の唐話辞書である『雅俗漢語訳解』に「^{どなか}儂家 女子自称ノ語、奴家ト云ヒ妾ト云ニ等シ」の例があったが、『無絃琴』に「^{どなか}儂家」が見られる。現在管見ではこの作品にしか見られない。これは、君主である女王の「ナアナ」の様子であるので、結局は女性に対する表現である。また、幸田露伴の翻訳物である『国訳忠義水滸伝』(大正12年、露伴全集33)には「^{われ}奴家」の例も見られる。

一般的に「奴家」は、近世に花を咲かせて比較的に多用されていたが、近代に入ってから急速に使用頻度が低くなった生命の短い語であったといえよう。

2.4 「洒家」について

「洒家」は中国俗語であるにもかかわらず、案外、俗文学にはあまり用いられていない語である。香坂順一が言っているように「洒家」に方言的要素(北方口語)があったことも影響していると思われる。「中國哲學書電子化計劃」(『水滸伝』は検索システムにない)を検索し

てみても『金瓶梅』にしか用いられていないことから見て、特殊な語であろう。これは「奴家」(女性の自称)とは反対に、男性の自称として用いられている、現代日本語の「おれ・わし」に当たる一人称代名詞である。

曾て幸田露伴は「字眼」で「魯智深がオノレといふ場合に、酒家と書いて居る。普通の人ならば自家とか何とかいふ所であるのに、酒家と云つたので智深の面目が発揮して大に面白い」(大正3年6月、露伴全集別巻下、p.404、2例)と述べ、『水滸伝』で英雄の一人である「魯智深」が使用したことを指摘している。幸田自身『国訳忠義水滸伝』を翻訳した際、「^{しや}か^か酒家^わ」のように「酒家」を生かした形で用いている。言語資料としては貴重ともいふべきこの「酒家」は、日本でどのように用いられていたのかを見てみよう。

酒家 一作灑音通ス陶冕曰字意ニ咱ノ字アリ蔣加反ナリ我ナリト有恐ハ酒咱音通ルナルヘシ。『俗語解』

晒家 我ナリ但ザイゴモノナドノ自称。俺 同。咱家 同。『訳通類略』(明治年間写本)

酒家 我ナリ。『劇語審譯』

酒家。咱^サ ワレラ北人方言自呼テ俺ト云ヒ、咱ト云フ、酒家咱家、～『小説字林』

セイカ 我ナリ。『支那小説字彙』

サアキヤア 酒家 我ト云コト也方言也。ウロハンチンギアキヤア 胡乱請酒家 ドウアラフトママヨメツタニ我ニフルマヘト云コト。『忠義水滸伝解』

気ニ得^テ酒家^ヲ 我ヲムネンガラセテ。輪ニ與^ス酒家^ニ 我ニマケルナリ。『水滸伝抄訳』

酒家 関西ノ方言魯智深モ揚志共ニ関西ノ人ナリ。『忠義水滸伝鈔訳』

酒家 ワレ。像酒家^{ニタリワレ} 抗西ノ方言。還ニ酒家^{ワレ} 也好 ヒゲヲノコシテワレニクレハヨカラント云辞。『水滸伝訳解』

酒家 ミドモ。揪住酒家怎地 身ドモヲヒキトメテナントスル。『忠義水滸伝』

酒家 ヲトコタテ。『忠義水滸伝考』

香坂¹²⁾は「酒家」について、『水滸』の他には例はあまりないと述べるとともに、「『水滸』でも、多くの登場人物が非選択的に用いているのではなく、魯智深と楊志二人に限ってこれを使用している」として、あまり用いられていない語であることが伺われる。

12) 香坂順一(1987)『『水滸』語彙の研究』光生館、p.13

この語は主に『水滸伝』に用いられている特殊な語であるため、そこから選びだした唐話辞書に取り上げられている。「洒家」が登録されていたことは、それだけに難語であったことを意味しているといえよう。「洒家」は一人称の「ワレ」系統であるが、その意味は微妙に異なっている。また、辞書によっては「関西の方言・抗西ノ方言」となっており、よく言われる「北方の方言」説とも異なっている。『水滸伝』において「洒家」を用いる「魯智深」は、中国の陝西省出身の人である。『水滸伝』は明代に書かれ「北宋」を舞台とするので、「魯智深」は西の出身になるだろう。ともあれ、『水滸伝』における「魯智深」の言葉遣いが特殊であったといえよう。この語は中国でも珍しく、『水滸伝』『金瓶梅』を除けば、日本に伝えられた主な中国俗文学ではその用例が見つからない。

また、近世の通俗和訳本、日本人作白話小説、漢文戯作にも用例が見つからない。それだけ、特殊な語であったといえよう。

いまだ思ひ給はずや。^{われら}洒家はさらなり、^{わ どの また}和殿も亦、～(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本5冊、p.275)33例。^{われら}洒家6冊、p.128)5例。9冊、1例。

^{され}然ばとよ、^{かれら うへ}他們が上は^{われら え}洒家も得知らず。(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集84、p.359)4例

^{まか}俛せば人の自在釜、^{ひと}洒家^{じざいがま}も尻^{われら}を炙^{しり}らんとて、^{あぶ}去向^{ゆくて いそ}を急がぬ～(『開巻驚奇侠客伝』曲亭馬琴、天保3年一天保6年、新古典文学大系87、p.440)5例

^{わ れ}洒家に^{はんてん(すこし)}半点^{ふう き}の富貴をもあたへば、(『忠臣水滸傳』醒世老人山東子、享和2年、和泉書院、p.132)2例

近世の資料では読本にのみ見られ、他の資料には見られない。『八犬伝』において多用されていて、一人称の複数形である「われら」の訓が施されている。馬琴の他の作品でも同様である。山東京伝の『忠臣水滸傳』では「われ」となっていることから、「われら」が馬琴の独特の訓であることと、単数・複数両方の訓が存在することがわかる。

明治期の唐話辞書には「洒家」の例があったが、一般的に広まっていなかったためか、漢語辞書には例が全くない。前言したように、漢文戯作や漢文小説にも用いられていない。管見では、近代における唯一の例ともいべき資料は『俠足袋』である。

然う、洒家が御屋敷に在た頃は十四五だツたかな。(『俠足袋』塚原洪柿園、明治35年1月。明文全89、p.173)7例。洒家(p.177)1例。洒家(p.197)1例。

今言うた決行るとは洒家が今度の出府した其の用向じやが、(p.173)3例

『俠足袋』に12例あるが、「おれ・わし・わしども・われら」のように多様な訓が見られる。複数になっている形も2例見られる。「洒家」は男性専用の語である。ここでも1例を除き男性使用の用例であるが、作品における最後の用例はお照という女性使用者であるので誤用かもしれない。

一般的に見ると、「洒家」は方言的要素もあり、中国においてもあまり用いられていないこともあって、非常に限られた資料にしか見られない。日本においても同様で、近世・近代を通して日本に伝えられたが、読本と、近代の極一部の資料にしか用いられていない特殊な語であったといえよう。

2.5 「渾家」について

一般に「つま」を表わす漢字表記には「妻」があり、似たような表現として「家内・細君・内儀」などがあるが、それに加えて、現代日本語では見られない「渾家」がある。普通の現代日本人なら首をかしげるような言葉であろう。『日国大』には、

こんか【渾家】[名]家内の全体。家内じゅう。うちじゅう。一家。「白石先生手簡」(1725)、『随筆一山中人饒舌』(1813)

ごうか【合家】[名]家内全体。一家内。家中。また、一堂。座。「琬鴟先生詠物百首」(1783)、『山陽詩抄』(1833)

とある。『日国大』の説明に従えば、日本における「渾家」の歴史は非常に浅いことがわかる。この説明では「つま」としての意味が付与されず、「うちじゅう」のような意味になっている。また、同義語として「合家」もある。『大辞泉』では「妻」の意味を与えているので、『日国大』でも「渾家」に「妻」の意味を与える必要があろう。『漢語大詞典』には、「全家」(唐以後)・「妻子」(元以後)の意味が与えられている。このように、中国でも「渾家」に「妻」の意味があり、「妻」の呼称でもある。「渾家」と共に同義語として「合家」(全家、全家人)もあるので、ここでも必要に応じ説明を加えることにする。

まず、唐話辞書から見てみよう。

渾家 カカ。『訳通類略』

渾家 妻ナリ。内義。『劇語審譯』

渾家。『学語篇』

令正 ナイギ。阿媽 同。渾家 同。『中夏俗語彙』

渾家 女房ノコト。『怯里馬赤』

渾家 古今小説。女房ヲ云。珠璣藪。妻ノコト。『徒杠字彙』

ウツンキヤア
渾家 ナイギ。『唐話算要』

渾家 女ボウ。『訳官雑字簿』(明治12年写本)

コン カ
渾家 女房一作ニ渾家ニ類云自称レ妻。『雅俗漢語訳解』

コン カ
渾家 女房。『小説字林』

カ カ
渾家 メ、ニョウバウ 拙荆、賤内、宅眷婦。『魁本大字類苑』(谷口松軒編著、明治19年)

コン カ
渾家 我が妻ナリ。『支那小説字彙』

ウツンキヤア
渾家 妻ノコト老婆ト同蔭ニテ称スル辞。『忠義水滸伝解』

渾家 妻ノコトカカト云ホドノコトバナリ。『忠義水滸伝鈔訳』

渾家 妻子ヲ云。渾家 老婆ナリ。『水滸伝訳解』

渾家 女房。渾家 カカ。『忠義水滸伝』

渾家 妻ヲ云。娘子 同上。『水滸伝字彙外集』

多くの唐話辞書に「渾家」が登録されていることをみると、この語も中国俗文学で多用されている語の一つであることが分かる。「中國哲學書電子化計劃」の資料でも俗文学の例文がほとんどである。「渾家」には、「妻・妻子・内儀・令正・女房・阿媽・かか」の意味を与えている。訓としての「阿媽」も中国俗語である。『訳官雑字簿』では、「渾家」と同じ発音の「渾家」に、「女ボウ」の訓を当てている。しかし、この「渾家」はどの資料にも見られないことから、「渾家」の誤植かと思われる。この語は日本に伝えられた中国文学資料にも現れている。

渾家金氏生ニ下男女二人^ヲ、(『小説奇言』岡白駒、寶暦3年、p.4ノ1才)1例

所^ヲ喜渾家^ヲ単氏、與ニ員外^ヲ同年同月同日、(『小説粹言』平安癸疑主人訳、寶暦8年、p.3ノ2ウ)9例

與^{モニ}同^ス渾家王氏^ト。(『小説精言』岡白駒、寛保3年、p.1ノ1ウ)19例

將^ツ此事^マ告^マ訴^マ渾家^一。(『今古奇觀』宮原民平註、大正15年7月、支那文学大観11、p.35)7例

訓読文では「渾家」が「ツマ」になっている。中国俗文学では「妻」のことを「渾家」として用いていたことが分かるだろう。現代中国語では「妻子」或は「愛人」の語を用いていて、「渾家」は口頭語として用いられていない。

那^カノ怪^{ハレモ}八^{ハチ}戒^{ケイ}悟^ブ淨^{ジヨウ}ト雲^{ウン}中^{チュウ}ニ在^イテ酣^{カン}戰^{セン}ヒテ居^イタリシガ渾家^{ツマ}ノ声^{コヘ}ヲキキテ二人ヲ〜(『通俗西遊記
(前編)』岡島冠山訳、宝暦7年、近世白話小説翻訳集、p.384)3例。後編1例。渾家『通俗孝肅傳』
(p.477)6例。妻子^{ツマ}『通俗孝肅傳』(p.482)1例。『通俗赤繩奇縁』(p.10)2例。『通俗平妖傳』(p.78)2例。
渾家^{ニヨウホウ}『通俗繡像新裁綺史』(p.263)2例。渾家^{カカゲン}『通俗繡像新裁綺史』(p.374)1例。渾家^{ニヨウボク}『通俗古今奇観』
(p.620)2例。渾家^{ニヨウバウ}『通俗古今奇観』(p.708)1例。渾家^{カカ}『通俗古今奇観』(p.652)1例。渾家^{ニヨウボク}『通俗平妖傳』
(p.80)1例。家内^{カナイ}『通俗平妖傳』(p.87)2例。渾家^{ヨメ}『通俗醒世恒言』(p.40)1例。渾家^{ツマ}『通俗醒世恒言』
(p.107)4例。渾家^{コンカ}『通俗醒世恒言』(p.207)9例。渾家^{コンカ(ツマ)}『通俗醒世恒言』(p.221)2例。家眷^{カナイ}『通俗大明
女仙外史』(p.400)1例。家小^{カシヤウ(カナイ)}『通俗醒世恒言』(p.15)2例。家眷^{カナイ}『通俗醒世恒言』(p.56)2例。家内^{カナイ}
『通俗醒世恒言』(p.30)4例。合家^{カナヒ}『通俗孝肅傳』(p.573)1例。合家^{カナイ}『繡像通俗金翹傳』(p.169)6例。
家内^{カナイ}『繡像通俗金翹傳』(p.241)4例。合家^{ミナミナ}『通俗醒世恒言』(p.32)5例。自家人^{カナイノヒト}『通俗醒世恒言』
(p.34)1例。

通俗和訳本には「渾家」が比較的に多用されている。「渾家」の音読みである「こんか」は『通俗醒世恒言』に多数見られ、すでに近世にはこの語を受け入れてから間もなく音読みをするほどに、日本人に深く浸透していたことが伺われる。また、漢語の「家内」の読みをつける場合がある。『漢語大詞典』によれば、「家内」は「妻子」の意味として用いられているので、代替漢語を用いている例である。また「女房」の音をつける場合もあるが、これは一種の和製漢語である。訓としては「つま」が多く、話の相手が誰かによって「かか・かかげん」をつけるなど多様な訓が振られていた。

「渾家」と同義の語として「合家」の例も見られる。『漢語大詞典』は「合家」に「全家、全家

人、一家老小」の意味を与えている。つまり「合家」には「妻」の意味はなく、『通俗醒世恒言』に見られる「みな・みなみな」や『小説奇言』の「又合家童僕、奉^シ承^ハ他^{ナルヲ}是新主管^{ナルヲ}」p.1ノ10オ)のように、「やうち」の意味が普通である。「やうち」も「家のなか・一つの家に住んでいる人」のことだから「みな」にあたる。『繡像通俗金鰲傳』や『通俗孝肅傳』にある「合家」は、厳密に言えば「妻」そのものではないので、ある意味では日本で狭い意味に限定して変容していたのだと思う。『通俗醒世恒言』にはまた「自家人^{カナイノヒト}」のような表現もあり、「妻」に関する中国俗語をうまく生かしていた。

さらに、中国俗文学で多用されている「家眷・家小」をそのまま漢字表記しているのも特徴である。これは、中国で「妻子」の意味として用いられていたもので、日本では中国俗文学を翻訳する際、俗語をそのまま援用した例である。当時の一般人にとって「家眷・家小」は難語であったはずだが、日本の訓を利用して普及した語である。このことには、状況は異なるけれども今野真二の表現を借りるとすれば「漢字で書きたい」¹³⁾心情も働いていたものと思われる。

この「渾家」は、日本の文学作品にも用いられている。

只見勘平^ル渾家^ガ活佳兒、(『海外奇談』鴻濛陳人重訳、文政3年、東北大学図書館蔵本、p.7ノ10オ)5例。渾家^{オンナドモ}p.9ノ4ウ、1例。

和^トニ渾家^{ウチマ}楊氏^ガ之間^ノ〜(『情天比翼縁』三木愛花、明治17年2月、国会図書館蔵本、p.5)3例

渾家^{そなた}も快来^{とくき}て見給はずや。(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本4冊、p.275)4例

又杉倉主^{すぎくらぬし}の渾家^{うちかた}は、昨夜^{よんべ}難産^{つづが}の恙あり(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本5冊、p.405)

目さへ耳さへ疎^{うと}き渾家^{そなた}の、何事をかよく知るべき。(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集84、p.50)4例。渾家^{つま}3例。

渾家^{そなた}に妬^{ねたみ}のころなくとも、その妾^{せふ}たるもの賢女^{けんぢよ}ならずば、(『開卷驚奇俠客伝』曲亭馬琴、天保3年一天保6年、新古典文学大系87、p.18)9例

13) 今野真二(2009)『振仮名の歴史』集英社新書、p.125、p.195など。

渾家^{やからおどろ}驚きまどひ東西^{おちこち}の医師^{くすし}を招き、藥飼^{まね}さまさまに用^{やく}ゆれど、(『高野薙髮刀』小枝繁^{もち}老人、文化5年、中本型読本集、p.275)1例

今回^{このたび}こそは渾家^{つま}にせんと、嘶^{いか}さば争^{おやこ}で母子^{おやこ}のものが、(『閑情未摘花』松亭金水編次、天保10—12年、日本名著全集人情本、p.732)2例

紀介^{きすけ}も尾花^{おぼな}も驚きまどひ、渾家^{おどろ}の男女^かを呼来^{なんによ}し、幸^{よびきた}じて助^{かろう}け揚^{たす}げ、(『催馬楽奇談』小枝繁、文化8年1月、新日本古典文学大系80、p.318)1例。渾家^{やうち}(p.331)1例。

渾家^{つま}(『忠臣水滸傳』醒世老人山東子、享和2年、和泉書院、p.161)1例

通俗和訳本では比較的^{比較的}に多用されていた「渾家」は、日本人作白話小説や繁昌記のような漢文戯作では見られないという異様な現象が起っている。勿論そのジャンルに「妻」と関連する内容がなければ採用する必要がないし、そういう内容があっても「妻」という字を使えばいいわけだが、実際には極一部の資料である『海外奇談』『情天比翼縁』に「渾家」が見られるのみで、基本的には「つま」の訓であり「おんなども」の例もある。

一方、馬琴を初めとする読本の世界では「渾家」が多用されている。音読の例はなく、やはり多様な訓を振って読みやすくしている。基本的な訓の「つま」をはじめ、「そなた・うちかた・やから・かない・やうち」の訓まである。「うちかた」は「他人の妻」を表わす語である。また、「やから・やうち」のように「つま」に限定せず、「家族全体・一族」の意味で用いられている場合もある。『催馬楽奇談』には「渾家^かの男女^{なんによ}」とあるが、これはどうも「つま」の意味というよりは、「渾家^{やうち}の男女^{なんによ}」と同じ役割をしているので「家の中」或は「家族全員」の意味にあたると思われる。この「渾家」は、馬琴以外の他作家も用いられていることから、読本の世界では比較的^{比較的}に広まっていたことになるだろう。

では、近代における「渾家」の事情はどうなのだろうか。

渾家^{コンカ(カナイ)} (『漢語文章早引』西野古梅、明治期漢語辞書大系16、明治8年、p.85)

渾家 ヤウチ (『漢語新字引』林三益、明治期漢語辞書大系21、明治9年、p.68)

渾家^{コンカ} ツマ (『音訓新聞字引』萩原乙彦、明治期漢語辞書大系21、明治9年、p.316)

渾家 (『文章漢語熟字早引』原田道義、明治期漢語辞書大系25、明治9年、p.362)

渾家^{コンカ} ツマ (『画引早引自由熟字在』大館正材、明治期漢語辞書大系34、明治11年、p.163)

コソ カ
渾家 カナイヂウ (『公益漢語伊呂波字引』堀中徹蔵、明治期漢語辞書大系45、明治22年、p.292)

コソ カ
渾家 ツマノコト (『雅俗漢語字引大全』中田幹母、明治期漢語辞書大系43、明治18年、p.313)

コソ カ
渾家 イヘヂウライフ (『新編熟語字典』内海以直、明治期漢語辞書大系51、明治33年、p.402)

サイ ド カ ケン
妻孥 カナイ 家眷 同 ヤカラ キョ カ
挙家 カナイ中 渾家 同 ヤウチ (『文章薈藻熟字早引』原田道義、明治期漢語辞書大系25、明治9年、p.362)

「渾家」の使用は、近世・近代の唐話辞書に多く見られたが日本の歴史から見て浅いもので、近世以前の漢語辞書には登録されていない。しかし、明治期に刊行された幾つかの漢語辞書に突然、この語が採用されている。「つま・家の・やから」などの意味があり、編纂者によって採用する解釈がかなり異なっている。このことから考えてみると、明治期以後は「渾家」がかなり広まって近代の人々に好んで用いられていた可能性が高い。

いま を つと つひ めり つ ま
今の良人モンテインは遂に娶て渾家となし～(『通俗花柳春話』二編、織田純一郎、明治16年11月、国会図書館蔵本、p.33)19例。

いま にん かく かく じその つ ま は
今三人の客が各自其渾家を称むるを～(『白金の指輪』菅城子訳、明治20年12月、明治翻訳文学全集2、p.209)1例。

近代の文学作品における「渾家」の例は、管見では上の例が全てである。漢語辞書の事情とは裏腹に文学作品では皆無ともいえるほど、その姿が見えなくなる。『通俗花柳春話』『白金の指輪』の翻訳作品には例が見られるが、少なくとも書き言葉の世界ではその生命が短く、すぐ消滅してしまった語の一つといえよう。つまり、近世中盤後半にはジャンルは片寄っていたものの花を咲かせていたが、その時期は非常に短い語であったということである。代りに近代の文学作品には、「妻」を基本として「家内・女房・内儀」をはじめ「細君」(中国でも用いていた古い漢語)も多用され、中国俗語である「渾家」はその居場所を奪われた。

2.6 「火家」について

「火家」の字を見て、ほとんどの人は火事でも起っている家なのかというほど、現代人にとっては全く正体不明の語である。やはり現代日本語としては用いられていない中国俗語

で、『日国大』にも登載されていないほどである。『漢語大詞典』によれば、「火家」は「伙計・以处理尸体为职业的人」とあり、『水滸伝』や『金瓶梅』の例を挙げている。「伙計」については「指合作共事的人，犹言同伴，伙伴・用以称呼同伴・旧指店员或其他雇佣劳动者」とあり、簡単にいえば「店員」や「なかま」の呼称である。中国においても、この語はそれほど長い歴史を持っていない語であるためか、主に中国俗文学に用いられている。

火家 下男ヲ云フ。『小説字彙』

火家 ケライノヤウナモノ。『訳通類略』

火家 手代 家来。『劇語審譯』

火家 町家ノ下男。『怯里馬赤』

火家 下男ナリ。『徒杠字彙』

^{クワ カ}火家 メシタキ又下男ヲ云フ。『小説字林』

^{クハ カ}火家 僕ノコト。『諸録俗語解』

^{ケライブン}火家 『魁本大字類苑』

^{ホウキヤ}火家 前ニアル使頭一ムレノ人ナリ。『忠義水滸伝解』

火家 メシタキモノ類。火家 シモヘ。『水滸伝訳解』

火家 ナカマ。『忠義水滸伝』(享保12年)

唐話辞書に「火家」が比較的多く登載されているが、実際は中国においてもそれほど多くの資料には見られないものである。中国語の研究家である香坂の一連の考察においても「火家」についての言及はない。『水滸伝』の語を集めている『水滸伝訳解』『忠義水滸伝』の唐話辞書には「火家」があることを見れば、香坂は「～家」の語と関連した研究において「火家」を見落としたということになるだろう。「中國哲學書電子化計劃」の検索の結果によると、唐話辞書にある「下男・家来・メシタキ・手代・僕(シモヘ)・ナカマ」の意味としては、『金瓶梅』に例が見られるのみである。それほど使用範囲も狭いし低頻度の語であることが分かるだろう。それにも関わらず、唐話辞書では重要な難語として認識されていたと思われる。それだけ特殊な語であったためか、『水滸伝』『金瓶梅』を除けば、日本に伝えられた中国俗文学には用例が見つからない。色々の通俗和訳本、漢文戯作などにも用例がない。

幾箇主管火家、自ニ従前月ニ爾来、(『海外奇談』鴻濠陳人重訳、文政3年、東北大学図書館蔵)

本、p.7ノ12才)1例。

「火家」は、形浄瑠璃作品『仮名手本忠臣蔵』を漢語訳したものといわれている『海外奇談』¹⁴⁾に1例見られるのみである。これは、翻訳物ではあるものの日本人作白話小説の範疇に入る。ここでは「メシタキ」として用いられている。唐話辞書である『水滸伝訳解』と『小説字林』にあった「メシタキ」と同様である。これに対し、曲亭馬琴の読本には、これを比較的多く採用している。

けふは^{な か ま}火家の^{なかなほり}回背にて、其^そ首へい^{すま}なねば済ぬとて、(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本4冊、p.298)7例。5冊(p.14)9例

慙れば京師の凶変を^{な か ま}火家へは都て秘して、(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本5冊、p.337)12例。6冊(p.64)2例

来春は、亦^{またかうな}講^{かま}火家に誘引て、^{さそはれ}嚴嶋なる^{いつくしま}弁財天に、(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集85、p.134)1例、^{な か ま}伙計85-p.362

我東国にて^{わが}騙局^{な か ま}火家に、^{つたへき}伝聞たることこそあれ。(『開卷驚奇俠客伝』曲亭馬琴、天保3年一天保6年、新古典文学大系87、p.446)5例。^{な か ま}伙家(新古典文学大系87、p.187)10例。^{か ぐ}家伙p.192。^{か ざい}伙家p.193。

こ^ここ^{かし}こ^しの^{しの}びを^を、^{な か ま}夥家の^{ものども}兵毎に^{ふれつた}徇伝へて、～(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本6冊、p.187)1例

前日講^{さきのひのこうな}夥家と^{かま}共侶に、^{もろとも}安芸の^{あき}嚴嶋なる、～(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集84、p.308)2例

馬琴の作品には「火家」もあれば「伙家」もあり、さらに「夥家」まである。すべて「なかも」の意味で用いられているのが特徴である。馬琴は「伙家」を「火家」に劣らず多用している。読本で用いられている「なかも」と訓じている辞書は、『忠義水滸伝』(享保12年)のみであった。一般的には「店員・しもべ」の意味で用いられているのに「なかも」一辺倒になっている。中国俗語で「なかも」と関係のある語は、「夥計・夥家」¹⁵⁾がその役割を担っている。「なかも」

14) 奥村佳代子(2015)『『海外奇談』の語句の来歴と翻訳者』『関西大学東西学術研究所紀要』48、p.30

15) 「夥計」(なかも)と関連した語については、次回に考察したい。

の類義語が多いのだが、ここでは接尾辞「家」と関連する語を中心に考察しているので省略したい。『開卷驚奇俠客伝』には問題の訓が一つ見られる。「家伙」(p.192)のように、基本的に「家財道具」を表わす意味である。「家伙」の逆の形である「伙家」を「なかま」以外に「伙家」(p.193)のように用いられているところも見られる。これは、「家伙」が「かざい」に引っ張られ、「伙家」を「かざい」と訓じて用いた誤用である。『漢語大詞典』の「伙家」の見出しを見ると「伙伴、相与共事的人・対同輩人或同伴的称呼、犹言伙计」となっていて、「なかま」以外に「かざい」の意味はない。これは、馬琴の作品以外には管見では見つからない状態で、極限られた資料に用いられていた語であった。

火家 シモヲトコ。下僕。(『漢語故諺熟語大辞林中』山田美妙、明治期漢語辞書大系53、明治34年、p.160)

火家 シモヲトコ。(『新編漢語辞林中』山田美妙、明治期漢語辞書大系56、明治37年、p.342)

近代の漢語辞書では唯一、山田美妙が編纂したものに見られる。その訓は「シモベ・下僕」のように中国語の意味に忠実である。しかし、山田美妙の漢語辞書には、正式の漢語もあれば中国俗文学由来の語も多数含まれている一種の唐話辞書的性格¹⁶⁾もある。つまり、多くの中国俗語が収録されているので、一般的な漢語辞書とは性格を異にしている。こういうことを考慮に入れば、明治期以後の漢語辞書には事実上登録されず、姿を消していったといえよう。「火家」は近代の文学作品には全く用いられていない。幸田露伴の『国訳忠義水滸伝』には「火家」(p.113)をそのまま用いているが、これは翻訳物である。

「火家」は、全般的に見て近世の馬琴の作品に集中していて、他の作品には殆んど用いられていない。また、『水滸伝』や『金瓶梅』以外にはあまり用いられていない、中国においても希な語であった。その影響もあってか、日本では殆んど用いられていないといっているほど特殊な語であった。

以上は、「～家」を接尾辞とした語は、上で考察した「自家・大家・奴家・洒家・渾家・火家」が大勢を占めているもののみを考察した。その他にも色々あるが、日本では用例が数例に過

16) 羅工洙(2004.09)「山田美妙著『漢語古言熟語大辞林』の唐話資料的性格」『日本語学研究』第10輯、韓国日本語学会

——(2004.12)「山田美妙著『新編漢語辞林』の唐話辞書的性格」『日本語文学』第23輯、韓国日本語学会

ぎないことと、紙幅の関係上、すべての提示するのは無理があるので、ここではどういう用例を提示するに止めたい。強いて区別すれば、「咱家・他家・冤家・官家・行家」が少々あり、非常に少ない例としては「容家・東家・後生家・人家・老家・顧主人家・顧家・阿家」が見られる。これらの語も、主として近世の時期に用いられていて多用されている語と軌を一にしている。

このことを見ると、多かれ少なかれ、近世・近代(特に近世)を通して人称・呼称の接尾辞「～家」を伴う語がかなり日本人により用いられていたことが分かるだろう。

3. おわりに

本稿は、中国俗語の人称・呼称の語を体系的に研究する一環として、接尾辞「～家」の語を考察した。日本の近世・近代には学問の一分野として唐話学が行なわれていて、その影響で語や文字の世界にも変化があった。中国俗語である「～家」の語は種々あり、日本文学における漢語・漢字表記の世界にもかなり応用されていたことが分かった。

考察の結果、日本の文献に見られる語には、①「自家・大家(合家)・奴家・洒家・渾家・火家(伙家)」②「咱家・他家・冤家・官家・行家」③「容家・東家・後生家・人家・老家・顧主人家・顧家・阿家・儂家」があり、3タイプに分けられる。これらの語は、『日国大』の「家」の見出しや『分類語彙表』に見られる語の性格とは異なるもので、主に中国俗文学に見られる人称・呼称のものである。このうち、「冤家・官家・容家」は、職業的性格のものでもある。

まず、①グループに入る語は、本稿で詳しく考察したもので、日本において多数用いられている。このうち「自家」は、現代日本語として未だに用いられている語である。現代日本語においては「自分」の意味としてはあまり用いられず、「自分の家」の意味として定着している。「自家」以外の語は日本において多用されているものの、近世の資料に集中しているのが特徴である。また、語によっては、近代の唐話辞書や漢語辞書、漢文戯作などにも極わずかに用いられている例がある。しかし、普通の文学作品には殆んど用いられていないのが特徴である。一般的に、近世に多用されている中国俗語は近代(特に明治期)にも多用される属性を持っているが、「～家」の語は近代の文学作品には援用されていない。

②③のグループは、ここでは詳しく紹介出来なかったが、②の方がやや多用されている。このように同じ体系を持っていながらも、語により使用頻度や使用範囲が大分異なっている。日本語には色々の人称・呼称があるが、これらの接尾辞「～家」の語も日本語の人

称・呼称を表わす漢字表記として活躍したといえよう。

このように、近世や近代の文学作品には中国俗語が用いられていて、日本語における漢字表記を多様化してくれた要因の一つでもあったのである。これらの人称・呼称の語は特に近世に流行った語であるが、音読の例は殆んどなく、親切に和訳することにより読者に理解させている。考えてみれば、中国俗語を用いず伝統的に用いられてきた漢字やカナで表記しても分かりやすく意思伝達ができただろう。にもかかわらず、日本人がわざわざ一般読者になじまない中国俗語を用いたのは、それだけ唐話学の影響があったことを物語っている。そして、それが漢字表記に現れているのである。当時の文人は、意識的にであれ無意識的にであれ、唐話学の知識を自分の作品に発露していたのである。

【参考文献】

- 今野真二(2009)『振仮名の歴史』集英社新書、p.125、p.195
 遠藤好秀(1987)「近代文学と漢字」『近代文学と漢字』漢字講座9、岩波書店、p.29
 岡田袈裟男(2006)『江戸の翻訳空間』笠間書院、p.52
 奥村佳代子(2015)「『海外奇談』の語句の来歴と翻訳者」『関西大学東西学術研究所紀要』48、p.30
 小田切文洋(2008)『江戸明治唐話用例辞典』笠間書院
 香坂順一(1983)『中国語の単語の話—語彙の世界』光生館、pp.96-97
 _____(1987)『《水滸》語彙の研究』光生館、p.8、p.13、p.23、p.68、p.90
 岡田袈裟男(2006)『江戸の翻訳空間』笠間書院、p.52、pp.340-350
 国立国語研究所(2004)『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書株式会社、pp.88-91
 鈴木丹士郎(1987)「読本の漢字」『近世の漢字とことば』漢字講座7、岩波書店、pp.235-236
 羅工洙(2004.09)「山田美妙著『漢語古言熟語大辞林』の唐話資料的性格」『日本語学研究』第10輯、韓国日本語学会
 _____(2004.12)「山田美妙著『新編漢語辞林』の唐話辞書的性格」『日本語文学』第23輯、韓国日本語学会
 _____(2015.12)「近代に於ける『乃+N』の語の意味用法について」『日本語文学』67、韓国日本語学会
 _____(2016.02)「近世・近代に於ける『所天・良人』について」『日本近代学』51、韓国日本近代学会
 _____(2016.08)「近世・近代における中国語の『～哥・～姐』の受容と展開」『日本近代学』53、韓国日本近代学会
 _____(2017.02)「近世・近代に於ける『阿～』系列の中国語の呼称について」『日本近代学』55、韓国日本近代学会

논문투고일 : 2017년 12월 20일
 심사개시일 : 2018년 01월 16일
 1차 수정일 : 2018년 02월 09일
 2차 수정일 : 2018년 02월 13일
 게재확정일 : 2018년 02월 19일

＜要旨＞

近世・近代における中国語の接尾辞「～家」の受容と意味用法

羅工洙

本稿は、中国俗語の人称・呼称の語を体系的に研究する一環として、接尾辞「～家」の語を考察した。考察の結果は次の通りである。

日本の文献に見られる語には、①「自家・大家・奴家・酒家・渾家・火家」②「咱家・他家・冤家・官家」③「容家・東家・後生家・人家・老家・顧主人家・顧家・阿家」があり、3タイプに分けられる。これらの語は、『日国大』の「家」の見出しや『分類語彙表』に見られる語の性格とは異なるもので、主に中国俗文学に見られる人称・呼称のものである。

まず、①グループに入る語は、本稿で詳しく考察したもので、日本において多数用いられている。このうち「自家」は、現代日本語として未だに用いられている語である。これらの語は、近世の資料に集中しているのが特徴である。②③のグループは、ここでは詳しく紹介出来なかったが、②の方がやや多用されている。このように同じ体系を持っていながらも、語により使用頻度や使用範囲が大分異なっている。

このように、近世や近代の文学作品には中国俗語が用いられていて、日本語における漢字表記を多様化してくれた要因の一つでもあったのである。日本人がわざわざ一般読者になじまない中国俗語を用いたのは、それだけ唐語学の影響があったことを物語っている。そして、それが漢字表記に現れているのである。当時の文人は、意識的にであれ無意識的にであれ、唐語学の知識を自分の作品に発露していたのである。

Acceptance and Meaningful Usage of the Chinese suffix “～家” in Edo-Meiji Period

Na, Gong-Su

In this paper, as a part of systematically studying the words of nominals and nomenclature of Chinese slang, I looked at the word of the suffix “～家”. The results of the consideration are as follows.

The words found in Japanese literature include ①「自家・大家・奴家・酒家・渾家・火家」②「咱家・他家・冤家・官家」③「容家・東家・後生家・人家・老家・顧主人家・顧家・阿家」. There are three types. These words are different from the character of the word found in the 「家」 words of 『日国大』 and 『分類語彙表』. They are those of persons and designations mainly found in Chinese slang literature.

The words ① has been extensively discussed in this paper, and it is widely used in Japan. 「自家」 is a word still used as modern Japanese. These words are characterized by concentrating on materials in modern times. The group of ② ③ could not be introduced in detail here, but ② is somewhat heavily used. Despite having the same system like this, frequency of use and range of use are largely different depending on the word.

In this way, Chinese slang has been used for literary works of modern and modern times, and it was one of the factors that diversified the kanji notation in Japanese. The use of Chinese slang that the Japanese does not bother to comprehend to the general readers is a fact that the influence of Chinese study was that much. And it appears in kanji notation. Writer at that time, whether consciously or unconsciously, had the knowledge of Chinese study discovered in his work.